日本看護研究学会九州・沖縄地方会

# ニュースレター

2020年7月

日本看護研究学会
九州・沖縄地方会事務局
国際医療福祉大学福岡看護学部
仙波洋子　吉村千草
〒814-0001
福岡市早良区百道浜１丁目７番４号
電話：(092)407-0805（代表）

## 会員の皆様へ

一般社団法人　日本看護研究学会九州・沖縄地方会会長　**楠葉　洋子**

令和２年を迎え、人々がオリンピック開催を心待ちにしていた矢先、新型コロナウィルス感染症流行にみまわれました。会員の多くの方々が、この感染症と向き合い、高い意識をもって日々奮闘されていることと思います。また、オンライン授業の準備・運用等で多忙な１日を過ごされている会員もおられることと思います。会員の皆様のご苦労を心よりご拝察申し上げます。

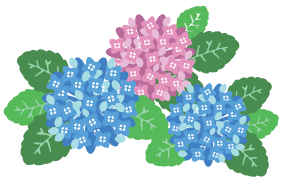
緊急事態宣言が発出された４月７日、福岡の夜は深い闇の中に吸い込まれていくような不気味な静けさがあり、私は恐怖感さえ覚えました。まさか、私達の日々の仕事や生活にまで影響する事態に至るとは想像さえしませんでしたから。

昨年のニュースレターで、私は、「明治・大正・昭和という激動の時代を生きて、生き抜いてきた方々に畏敬の念を感じることが多々ありました。自分自身が３つの時代を生きていくことになると思うと感慨深いものがあります」と述べました。しかし、私を含め会員の多くが戦争を知らない幸せな時代を生きてきたのではないかと思います。令和になり、新型コロナウィルス感染症の流行は、我々に与えられた試練なのかもしれません。

また、私が看護師として病院に就職した時代について、「パソコン・インターネットも知らず、採血や尿器交換も素手で行うなど、現在では考えられないようなことをしていたように記憶しています」とも述べました。今はどうでしょうか。もう既に「パソコンのキーボードやマウスも消毒もせず使いまわしていたよね」「ブッフェ形式のレストランではマスクも手袋もせず、トングも使いまわしていたよね」「今では考えられないよね」と言っているに違いありません。

平成は、パソコン・インターネット時代の到来、医療安全へ向けた意識の強化、医療に関わる様々なテクノロジーの進化等に伴う「変革」の時代の幕開けであったと思います。それらは、令和になり、一気に加速されました。オンライン診療、オンライン授業、オンライン実習の時代になってきました。しかし、私たち看護職は、たとえ手袋を装着していてもマスクをして防護服を着ていても、画面や音声だけでの看護であっても「看護のこころ」だけは忘れないでいたいものです。

さて、４月７日から３か月あまり、日本では緊急事態宣言が解除され、自粛から with コロナという新たな日々が始まりました。感染の第２波、３波のリスクを抱えながらではありますが、地方会の事業のひとつである学術集会は、予定通り開催することにいたしました。幸いにも会期が 10 月末で時間があったことや学術集会長の協力もあり、WEB 開催として実施することにいたしました。また、本年度のニュースレターは、初めて学術集会で発表された看護師長さんと３人の子育てをしながら発表を続けている若手教員に執筆をお願いいたしました。是非、ご一読くださいますようお願いいたします。



＊＊＊　**事務局より**　＊＊＊

◆　まだまだ新型コロナウィルスの影響で先が見えない状況でありますが、地方会学術集会では、今後も皆様と一緒に看護に関する情報を共有・発信する場であり続けたいと願っています。

## 昨年の地方会で演題発表された会員からのメッセージ

### 日本看護研究学会第 24 回九州・沖縄地方会学術集会に参加して

佐伯中央病院　川野真貴

日本看護研究学会第 24 回九州・沖縄地方会学術集会において、「場当たり的でない計画的な看護の重要性を再認識できた事例の報告」と題し、認知症の患者さんに対する看護についての事例報告を行う機会を得ました。今回の発表をきっかけに、私たちの提供している日ごろの看護に関して、スタッフとともにあらためてていねいに振り返ることが出来たと思います。

超高齢化が進み、入院している患者さんの多くが認知症を抱えています。また、環境の変化によって激しいせん妄状態になる患者も少なくありません。

そういった患者さんに対して、業務のなかで時間に追われてその場しのぎの対応をしてしまっていないか、「どうにもならない厄介な患者さん」としか捉えられず、知らず知らずのうちに「あきらめの看護」をしてしまっていないか。振り返ると反省するべき点も多くあります。

地域包括ケア病棟の師長となって２年目のいま、疾患も治療もさまざま、入院期間は２カ月間といった状況のなかで、どんな患者さんに対しても、入院中も退院後もその人らしい生活を送れるように支援をしていきたいと心から願っています。

今年度は、病棟内に認知症ケアのチームを作って定期的な勉強会を行い、一年を通して学びを深めていく取り組みをはじめました。その学びを通して、患者さんやご家族の生きてきた歴史や背景に真に関心を寄せ、全人的な視点からアセスメントを行い、患者さんやご家族が人として尊重されていると感じ、生きていることの幸せを実感してもらえるような看護をスタッフとともに探求していこうと思っています。

学会発表の準備は正直たいへんではありましたが、日常業務だけに終始せず、今後もまたこのような機会を活用し、日々の実践を振り返ったり有意義な意見交換をしたりして、自己研鑽に励んでいきたいと考えています。

---

### 継続は力なり～学術集会での研究発表を通して～

国際医療福祉大学福岡看護学部　吉村千草

私は、大学教員として 5 年目を迎えました。今現在、子育ての真っただ中で、上は小学校 2 年生から下は 2 歳まで 3 人の子供がおります。子育てをしながら大学での教育に加え、研究を継続する難しさをひしひしと感じております。

そのような状況で、恩師から「年に 3 本は論文を書きなさい」と叱咤激励されつつも、なかなか論文を書くまでは至らず、せめて「年に 1 回の学会発表は継続しよう」と自分の中で目標を決めてやってきました。ある時は、大学に遅くまで残り、ある時は子供たちが寝静まってから作業し、どうにか年に 1 回の研究発表を継続してきました。九州・沖縄地方会学術集会での発表は、地方会ということもあり、以前の職場の同僚や大学・大学院の頃の恩師・先輩の方々との再会の場ともなり、再会を喜んだり、お互いに近況報告をし合ったり、これまで親交がなかった方々との新たな出会いもあり、私自身の糧となっています。初めての学術集会での発表は、ポスター発表でしたが、手が震えおそらく声も震えていたと思いますが、どうにか時間内に発表し終え、質問にも答えることができ、安堵したことを今でも鮮明に覚えています。

「継続は力なり」という言葉がありますが、少しずつでもコツコツと続けていくとそれがいつしか大きな成果に繋がることを、身をもって経験しました。研究を続けることで自分では気づかないほどの小さな進歩があったことを、科研費の若手研究が採択されて実感することができました。これは、子育てと仕事の間で葛藤しながらも「年 1 回の学会発表は継続しよう」という目標を達成し続けた成果であったと考えます。

これからも「継続は力なり」という言葉を胸に、小さな一歩を積み重ねながら研究を継続していくことで、大きな成果を得ることができるよう日々精進していきたいと思います。

# 一般社団法人日本看護研究学会

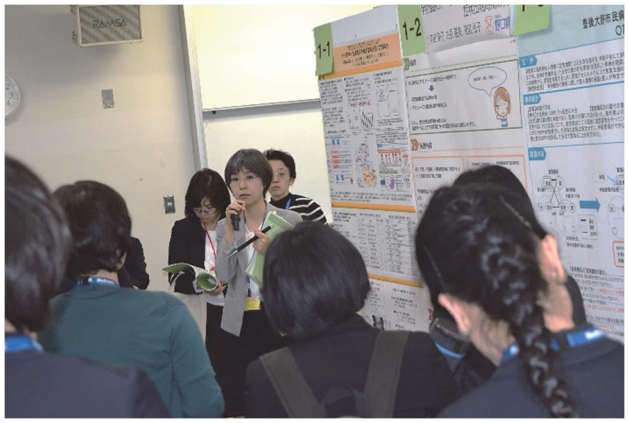
# 第 24 回九州・沖縄地方会学術集会を終えて

学術集会長　原田 千鶴

日本看護研究学会第 24 回九州・沖縄地方会学術集会は、秋晴れの好天候に恵まれた令和元年 11 月 9 日に、大分大学医学部挾間キャンパスにおいて開催いたしました。会員の皆さまをはじめとする多くの関係各位のご支援のもと 九州・沖縄地区内外から 160 名を超える方々がご参加くださり、盛況の中で終了することができました。改めて感謝申し上げます。

第 24 回の学術集会は、「事例報告から事例研究へ」をメインテーマとしました。これをテーマとした理由は、人々の生活様式や価値観の多様化、健康問題の複雑化など看護の環境が変化している中で、日々取り組まれている看護実践に今一度注目し、そこに在る看護の本質に迫る知を探究する必要があると考えました。そこで、看護の実践知を概念化し発見する研究方法としての『事例研究』に注目しました。

特別講演では、事例研究法の研究に取り組んでいらっしゃいます内田雅子先生（高知県立大学教授）にご登壇いただき、事例研究について、事例研究論文と事例報告書を区別しながら、事例報告を事例研究へとステップアップするための方法についてお話しいただきました。また、事例研究は、現場の看護情報の質・量の変化や個人情報の保護の研究倫理課題など事例研究を行う環境が厳しさを増しているからこそ、実践家個人にとっても組織にとっても看護の実践知を明らかにする研究方法としての意義があるとお話しされました。



続くシンポジウムでは、事例研究に取り組んだ 3 名の実践家のシンポジストより研究をご紹介していただき、事例研究に取り組んだ成果と課題についてお話しいただきました。事例研究の取り組みによって、実践家の実践活動の質の変化が、組織の実践の質に波及していくこと、また、事例研究に取り組むために、研究環境調整の整備や支援が必要であることが、それぞれの立場から述べられました。

午後からの一般演題発表（口演・示説）では、学術研究だけでなく事例報告、活動報告の計 25 演題の発表が行われました。今年は、多くの臨床の実践家の皆様に発表をしていただきました。どの発表も興味深く、時間ギリギリまで質疑が行われました。

本学術集会での各プログラムを通じた議論や情報交換が、皆さまの研究・実践の一助になったものと思います。

最後になりましたが、本大会の開催には、ご広告やご寄付にご賛同いただき、多大なご協力を賜りました医療機関、企業団体の皆さま、 査読や座長をしていただきました皆さま、企画委員、 実行委員、学生ボランティアの皆さま方に心より感謝とお礼を申し上げます。

# 一般社団法人　日本看護研究学会　第 25 回九州・沖縄地方会学術集会ご案内

## メインテーマ　ダイバーシティ時代の看護研究

日本看護研究学会 第 25 回九州･沖縄地方会

学術集会長　中嶋 恵美子

このたび､日本看護研究学会　第 25 回九州･沖縄地方会学術集会を開催致しますこと､ご案内申し上げます。

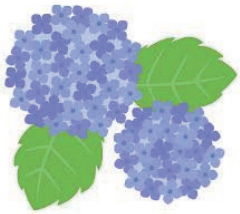
ご案内に先立ちまして、新型コロナウイルス感染症の発生に伴う社会的混乱において、医療機関や行政機関の第一線でご活躍を頂いている看護職者の皆様に、心より感謝を申し上げます。また、講義や実習などの新しい実践方法の検討と展開に日々ご苦労をされながら、看護学教育の発展に寄与して頂いている教育関係者の皆様にも敬意を表します。

本学術集会は、そのような情勢の中で皆様の安全と健康を守りつつ、より多くの方々にご参加頂けるよう、オンデマンド動画配信を取り入れた WEB 開催を実施することに致しました。

今回のテーマに掲げている「ダイバーシティ」、すなわち、多様性は外見的・内面的な違いを指しますが、私たちは、その「違い」こそが、新たな発想やアイディア、価値観を生み、看護に寄与する研究を発展させるものと考えています。 これまでの枠組みを超えて、持続可能な、新しい看護研究の在り方を考えていく機会としたいと思います。

会員の皆様をはじめ、多くの方にご参加頂きますよう、企画委員一同、心よりお待ち申し上げております。

日　時　：令和２年１０月３１日（土）～１１月１５日（日）
開催方法 ：WEB によるオンデマンド開催（期間中はいつでも、何度でもご視聴頂けます）
プログラム：学術集会長あいさつ
　学術集会長　中嶋恵美子氏（福岡大学医学部 教授）
　プログラム１．シンポジウム
　テーマ「ダイバーシティが拓く研究ネットワークの構築」
　講　師　阿比留 正弘　氏（福岡大学経済学部 教授）
　　上原　吉就　氏（福岡大学スポーツ科学部 教授）
　　塚原　ひとみ 氏（福岡大学医学部 教授）
　プログラム２．スペシャルセミナー
　テーマ「南極における研究と生活」
　講　師　　林　政彦　氏（福岡大学理学部 教授）
　プログラム３．一般演題（ホームページへの抄録掲載をもって発表に代えさせて頂きます）



演題募集期間：令和２年７月１日（水）～８月３１日（月）１２：００まで
参加登録期間：令和２年７月１日（水）～１１月１５日（日）
参　加　費 ：２，０００円（筆頭演者・共同演者ともに参加登録が必要です）
学会ホームページ：http://jsnrkyusyuokinawa.kenkyuukai.jp/special/index.asp?id=32575
＊本学術集会ホームページ運営は「m3.com」を利用しており、演題登録や参加登録には「m3.com」のアカウント登録が必要です。詳しくは学術集会ホームページをご覧ください。

学術集会事務局 ：福岡大学医学部看護学科内
〒811-0180　福岡県福岡市城南区七隈 7-45-1
TEL 092-801-1011(代表)　E-mail：jsnr25kyu@fukuoka-u.ac.jp